

超音波検査が Lemmel 症候群の発見に有用であった一例

◎藤田 愛華¹⁾、大久保 洋平¹⁾
社会医療法人 天神会 新古賀病院¹⁾

【はじめに】 Lemmel 症候群とはファーテー乳頭部近傍にできた十二指腸憩室が胆管や胰管を圧迫し、胆汁や胰液の流れが悪くなることで肝胆胰疾患が生じる稀な病態である。今回、超音波検査（以下 US）が Lemmel 症候群発見の契機となった一例を経験したので報告する。

【症例】 80 歳男性。前医で CT・US にて 2019 年より総胆管拡張を指摘されていたが、原因不明のため経過観察されていた。今回精査目的で当院紹介受診となった。

【来院時血液データ】 TP:6.4g/dl、Alb:3.5g/dl、A/G 比:1.21、AST:38U/l、ALT:22U/l、LDH:279U/l、γ-GT:260U/l、ALP:75U/l、T-Bil:1.2mg/dl、AMY:65U/l

【超音波所見】 主胰管：4mm、肝内胆管：5mm、遠位胆管：17mm と拡張あり。胰頭部に十二指腸と連続する境界明瞭、辺縁整な低エコー域を認めた。また内部にガスを疑う可変性のある高エコー像を認め、傍乳頭憩室を疑った。これにより胆管が圧迫されていると考え、Lemmel 症候群が鑑別に挙がった。

【MRCP 所見】 肝内胆管・総胆管の拡張、主胰管の軽度

拡張を認めたが、明らかな結石や壁肥厚など閉塞機転を疑うような所見は指摘できなかった。

【内視鏡所見】 胆管カニュレーションを行い造影すると、乳頭部辺りの下部胆管に狭窄を認めた。形態からは憩室による圧迫を疑う所見であり、Lemmel 症候群と診断された。

【考察】 十二指腸憩室は大腸憩室に次いで多い消化管憩室であり、上部消化管検査にて 12~27% に認められる。特にファーテー乳頭部付近は、胰臓や十二指腸下行脚の発生学的構造上脆弱なため、十二指腸憩室のうち 70~80% が乳頭部付近に発生すると報告されている。今回胆管の著明な拡張を認め、ファーテー乳頭部付近にガスを疑う高エコー像が描出された。十二指腸との連続性や、高エコー像の可変性の有無を確かめることで、超音波検査でも傍乳頭憩室を鑑別に挙げることが可能と考える。

【結語】 超音波検査が Lemmel 症候群の発見に有用であった一例を経験したので報告する。

連絡先：0942-38-2222（代表）